

## お彼岸（彼岸会）

毎年春分・秋分の日を中心に勤修される法要。日本で始まった仏教行事といわれる。「彼岸」とは生死を超えたさとりの世界である浄土のことで、浄土真宗では浄土に思いを寄せ、仏徳讃嘆・仏恩報謝の思いを新たにす法要とされる。

藤田 哲史

阿弥陀さまの願いに満たされて…………… 1

成実 弘至

男がスカートをはくとき―異性装の歴史― …… 11

八幡 真衣

来てくれてありがとう…………… 21

武田 晋

「此岸」と「彼岸」…………… 31

表紙絵・挿絵／いとう 良一

# 阿弥陀さまの願いに満たされて

藤田 哲史

阿弥陀さまのお浄土にはさまざまな呼び方がありますが、その一つとして親鸞さまは「報土」とお示しく下さいました。

「報土」の「報」は「酬報」ということです。一般的には「報酬」という言い方をしますが、同じ意味になります。「酬報」とは「はたらき通りに報われた」ということです。「報土」とは、阿弥陀さまの本願に酬報した世界ということなのです。

ですから「浄土」とは、阿弥陀さまの本願の通りにできあがっている

世界なのです。阿弥陀さまのはたらきが正しく報われた世界ということ  
です。

阿弥陀さまの本願とは「南無阿弥陀仏を称え、阿弥陀如来の心を聞く  
ものを必ずすくう」という誓願です。親鸞さまは、

ただ名号を称えるところに、衆生のすべての無明を破り、衆生の  
すべての願いを満たしてくださるのである。

（『顕浄土真実教行証文類（現代語版）』二八頁）

とお示しく下さいました。私たちの志願を満足させようという願いが、  
阿弥陀さまの本願であると教えてくださったのです。

私のこの身、このいのちが真に願っていることを「志願」といいます。  
この身、このいのちが真に願っていることは、いったい何でしょうか。  
私たちは今新しい時代の中で世間の価値観に振り回されて、この身、こ  
いのちが真に願っていることさえ、見失いがちなのです。

人間としての生命をめぐまれた、たった一度の人生です。たとえ思い  
通りにいかない、難しい、煩わしい、限られた人生であっても、「生ま  
れてきてよかった、生きてきてよかった」そう言い切れる人生を送りた  
いものです。

「この人生、力いっぱい精いっぱい生き抜きたい」

それこそが、本当の願いではないでしょうか。

その「志願」を満たすものこそが、阿弥陀さまの本願なのです。

高校二年生の息子が、中学二年の時のことです。

野球部に所属し、チームメイトと毎日汗を流していた、ある秋の日のこと、上級生である三年生が引退し、新チームが結成されました。息子はレギュラーに選ばれ、ユニフォームをもらって帰ってきました。

背番号はなんと「1」で、びんやらピッチャーでエースのようです。

「よし、仲間たちとしっかり練習してビュンビュンと投げて、優勝をめざすぞ」

息子は嬉しそうにそう言つと、「お父さん、キャッチボールしようぜ」と、また外へ飛び出していきました。その投げてくるボールの速いこと、もうとても私ではキャッチボールの相手は務まりません。

息子はいつのまにか、父親である私よりも背も高くなって、ずいぶん

大きくなりました。子どもがどんどん成長していく姿というのは、見ていてまぶしいものですね。

ところが、年が明けたとたん、新型コロナウイルス感染症対策のため、さまざまな行動の制限が要請されるようになりました。県や市の大会は中止となり、毎日の練習さえ制限されてしまいました。息子の部屋には、一度も袖を通すことができなかった背番号「1」のユニフォームが、むなしく掛けられたままです。

夕食の時のこと、私は息子にこう声をかけました。

「今年の三年生はかわいそうやな」

それを聞いた息子は何も言わず、立ちあがって自分の部屋へと入ってしまいました。